鹿児島県立川内高等学校
校長通信
第10号（令和8年10月20日／校長 大倉秀心）



校訓「自律　敬愛　剛健」
鹿児島県薩摩川内市御陵下町６番３号
電話（0996）23-7274
FAX（0996）22-1542

『生きる言葉』

昨年読んだ本の中に、印象深い一冊がありました。俵万智さんの『生きる言葉』。近年、SNSにおける見るに堪えない誹謗中傷、様々な事業所に対する理不尽なクレーム、対人関係におけるコミュニケーション不和など、言葉に対して注意を払わなくてはならないと同時に、深く考えなければならないと思っていたところなので、即買いしてしまいました。言葉を扱うプロである歌人の俵さんが、どのようなお考えをお持ちなのか確かめてみたかったのです。

どういう状況で読まれるか

読んでみると興味深い話がたくさんあったのですが、ここでは大学の推薦入試の出願の時期であることを踏まえて、皆さんにも意識しておいてほしい内容を一部抜粋します。（途中省略箇所あり）

具体的な読者がわかっている場合は、できるだけ相手に寄せて書く。身近なところでは、ラブレターとか、大学の志望理由書とか、就活時の「御社への入社を希望する理由」とか。相手を知り、どういう状況で読まれるものなのかを考え、作戦をたてる。これもまた言葉を生かす方法の一つだ。

高校生の時に県の英作文コンテストで優勝したことがある。題は当日会場で発表され、規定時間内に英語で作文を書くというものだ。

「私が行ってみたい外国」という割とベタな題が出された。同じ題でものを書くとき、一番やってはいけないこと。それは大多数の人が書きそうなことを、大多数の人が書きそうな理由とともに述べることだ。まして、こういうコンテストの場合、審査する人は同じような作文を大量に読まされてウンザリしているはず。そこで差別化しなくてはならない。できれば、誰も書かないような珍しい国に行きたい。

が、当時の私は、珍しい外国に住んでいる親戚がいるわけでもなければ、普段から新聞を読んで世界情勢に関心があるわけでもない。情けないが思い浮かぶのは「アメリカ」とか「イギリス」だった。一番あかんやつである。英作文コンテストに出ようなどという生徒は、少なくとも英語に興味があって、英語圏の国に行ってみたいと思うのは当然だ。自分の英語力を試してみたいとか、英語を通して友達を作りたいとか、将来英語を活かした職業につきたいとか、そういう理由で。つまり、これらの理由もあかんやつである。

そこで私は一計を案じた。数少ない手持ちのカードを、なるべく有効に使うためまずは次のように書き出した。

The country that I want to go is United States of America.

私の行ってみたい国はアメリカ合衆国です。はい、一番あかんやつ登場。これを目にした審査員は思うだろう、「またか」と。で、どうせ続くであろう理由も想像がつく。そこで次のように続けた。

その理由は、英語が好きだから、ではありません。英語で友だちを作ってみたいから、ではありません。将来英語力を活かして仕事をしたいから、でもありません。そして、「私がアメリカに行きたい理由は、アメリカが大嫌いだからです」と結んだ。審査員に「ん？」と思ってもらいたかったし、実際私はアメリカなんぼのもんじゃいという気持ちを持っていた。入学以来、一番の仲良しだった友人が、前の年にアメリカに留学してしまったのである。それだけでも寂しいのに、期間が一年だから、帰国後の学年は別。一緒に卒業式を迎えることはできない。

留学試験に合格したことをキラキラした目で話す彼女を見ながら、私と離れることなんか一ミリも寂しくなさそうだなと、内心がっかりしていた。作文の後半は、その鬱憤というか不満をぶちまけ、ラストは「そういうわけで、私から大事な友だちを奪ったアメリカという国が、どれほど素晴らしいところなのか、いずれ確認に行きたいと思っています」と着地した。「なんだ、またか･･･」と期

待値を思い切り下げた上で「んん？」と思わせる狙いが功を奏したのだと思う。（『生きる言葉』俵万智　新潮社）

これは、大学等への志望理由書などにも当てはまることだと思います。私は常日頃から皆さんに、「川内だからできること，川内でしかできないこと」を意識して学習や探究活動を行ってほしいと伝えています。それと同じことなのです。皆さんにしかできないはずの経験を堂々と言葉で表現する。これが受験生の中で皆さんを唯一無二の存在にすることを忘れないでください。

志望理由書に表れる生徒の個性

喜界高校の教頭時代，私は大学等を総合型や推薦で受験する生徒の志望理由書等に関する相談を受けることがよくありました。そのとき私は、その生徒のこれまでの体験を丁寧に聞き取りながら、受験生の中で「君にしか語れない体験やエピソード」を入れるようにアドバイスしていました。一見、取るに足らない出来事も、その生徒の成長や自信につながったことであれば一気に輝きを増すのです。人に見せることについて承諾はもらってありますので、いくつかの生徒の志望理由書（自己推薦書・活動履歴書）の一部をここで紹介します。（→以降は私の所見です）

（生徒A）私が在籍する喜界高校は小規模校で、部員不足はどの部にとっても恒常的な問題だ。ソフトテニス部も部員は3人で、1人が休めばできる練習が大幅に減ってしまうので、簡単に練習を休めない緊張感があった。2年次に主将を任されたとき、一度仲間が辞めそうになった。私は主将として、お互いが普段感じていることや考えていることを徹底的に語り合う場を設け、考え方を擦り合わせこの状況を乗り切った。このとき、少人数だからこそお互いのコミュニケーションが普段から大切になることを学んだ。これを機に、顧問からの練習指示を待つだけでなく、少人数でもできる練習を部員と共に工夫していくよう主体的に動けるようになった。→大人数の部活動の主将をしていたことを自慢げに語る体験談はよく目にしますが、たった3人の部活動だからこそ、きちんと言葉でコミュニケーションしないといけないことを学んだことは、彼にとって貴重な経験だったと感じました。お互い言葉などなくてもわかり合っていると思っている夫婦が、コミュニケーション不足からすれ違いが生じて離婚してしまうようなことと根底は同じだと思います。それを高校時代に知ったのですからこれは大きな体験です。

（生徒B）中高の6年間は吹奏楽部に所属し、高校では副部長として指揮を執ったり部をまとめたりした。生徒数が少ない喜界高校では単独でコンクールに出場することができず、中学校との合同参加という形をとっている。休日を中心に合同練習を行ってきたが、年齢差や技術差のある中学生と一つの作品を仕上げるのは大変だった。そこで、一人一人の演奏の癖や持ち味を注意深く観察し、それぞれの性格に合った声かけや助言をしてみると中学生たちは以前にも増して楽しくいきいきと演奏ができるようになった。自分の接し方を変えることで、中学生たちがメキメキと実力を付け、自分たち高校生と一緒に立派な演奏ができたことに喜びを感じるとともに、教えることの難しさとやり甲斐を同時に知った。→部活動の中で，年の差がある中学生一人一人を観察し、対応を考える体験は中高一貫校ならではの経験です。小学校教師志望の彼女が高校時代に個に応じた対応（将来の児童一人一人に対する対応）を学んだことは大きな収穫だったに違いありません。

（生徒C）高校2年の夏、佐賀県で開催された「九州地区子ども会ジュニア・リーダー研修会」に思い切って参加した。各県から集まったジュニア・リーダー達と「リーダーとは何か」について議論した。私はその時まで、喜界島という小さな島の固定化された人間関係の中で、与えられた役割を真面目に責任感を持って果たすことで、何となくリーダーとして扱われてきた。しかしこの研修会で様々な価値観を持つ人たちと接し、リーダーは周囲に配慮しつつも自分の意見をはっきりと表明すべきことの大切さを学んだ。この経験を学級総務や生徒会の議長において活かすことで、周囲からの私に対する信頼感が強まったと実感している。旧知の間柄でも、はっきりと言葉でコミュニケーションする大切さを学べた貴重な体験だった。→島の外に出て初めて、ただのお利口さんでは駄目だと、頭をガツンと殴られたような体験をし、生まれ変わった自分を上手に表現できていると感じました。

このように，志望理由書には他の人が絶対に書けないような経験やエピソードを盛り込んでほしいのです。ちなみにこの3人は見事第1志望の国公立大学に合格しました。来年、再来年受験を迎える1・2年生は、普段から印象に残ったり、感動したり、自分の考えを改めさせられた出来事や体験はノートに書き留めておくと受験時に大いに役立つでしょう。